

調査・研修報告書（会派個人用）

会派名：地域政党きずな庄原議員団

報告者： 國利 知史

実施場所：福井県県民ホール ほか	実施日：令和5年10月6日～7日
■目的・課題・問題事項（調査・研修に先立っての思いや本市の現状 など） 第63回全国国保地域医療学会へ参加した。 「コロナ超え、今こそ羽ばたく地域包括ケア」がメインテーマとなっており、国民健康保険診療施設関係者が全国から集い、地域医療及び地域包括ケアの実践報告やこれからの在り方を議論する学会であり、本市の地域包括ケアシステムの今後に活かすことを目的とした。	
■参考とすべき事項 【特別講演】コロナ超え、今こそ求められる地域医療の近未来像（講師：池端幸彦） コロナ後の医療は外来は減るが、在宅の需要が増えてくる。しかし、在宅医療が進めないのは、現代の家庭は共働きや核家族が多いからである。 高齢者の医療は、医療と介護を一緒に考えていかなければならない。地域包括ケアと地域医療は車の両輪のような関係でなければならない。そのためにもかかりつけ医が重要となり、その機能を充実していくことが重要となる。在宅ケアの条件としては、いつでも相談できる医師がいることや、必要な時に入院できるベッドがあるかどうかが必要である。そして本人の気持ちはどうなのか、家族の思いはどうなのかが最も重要であり、一番に尊重すべきである。 在宅医療は「食べる」「動く」「交わる」ことが必要であるため、地域密着型、多機能型でなければならない。そのためにはそれぞれの職種が連携する多職種連携が必要不可欠である。 【専門分科会】地域で取り組む業務維持可能な「食支援」を考える（講師：長谷剛志） 「食べること」は生れてから死ぬまでのすべてのライフステージにおいて生涯の問題である。特に高齢者は食べることが原因で、重大な問題を引き起こす可能性が大きい。「食べる」ことへ問題を抱えているのならば、何が原因なのかをはっきりさせる。「食べない」のか「たべられないのか」「なぜ食べられないのか」問題点をはっきりとさせることが重要である。 「食べること」の問題を解決するには一つの職種だけでは無理なので、医師、ケアマネージャー、栄養士など多職種の連携が必要である。 【専門分科会】歯科診療所閉所、新たな連携で前進（講師：東条環樹） 医療、保健、福祉が一体となった総合施設にあった歯科診療所が閉所になった。ここでは外来診療、歯科保健事業、在宅訪問診療、口腔ケア指導などが行われていた。ここでは「口から食べること」にこだわり、歯科医師や歯科衛生士が口腔ケア、口腔機能維持を高齢者福祉施設や在宅で行っていた。「口から食べる」ことを続けるために、歯科医師や歯科衛生士、ケアマネージャー、訪問看護、間でカンファレンスが月二回の頻度で行われ、また、本人や家族とも情報共有が行われるプロセスとなっていた。しかし、その歯科診療所の閉所とともにこのプロセスができなくなることが起こったが、幸い歯科開業医との連携が決まり、このプロセスは継続することとなったが、体制を維持するのにも課題も浮き彫りになった。	

■提言・その他（本市の施策等にどのように活用すべきか など）

この度の全国国保地域医療学会では、多くの講師やパネリストが事例発表とともに公演が行われた。幾つかの分科会に分かれていたが、参加した公演で頻繁に出てきた言葉が「多職種連携」である。

地域包括ケアシステムの構築のためには、医師や看護師、ケアマネージャー、栄養士、歯科医師、歯科衛生士など様々な多職種の人たちが連携していることが分かった。また本人がどうしたいのか、本人が人生の最後を幸せだったと思うことができるには、どうすればよいのか、家族とともにしっかりと話をして、その実現に向けて様々な立場の職種の人たちが連携していくことが必要だと感じた。

本市では西城市民病院を中心に地域包括ケアの取り組みが行われている。西城市民病院からも病院長をはじめ、職員の方々も参加されており、情報の共有が図れたと思うので、今後は様々な場面で協力していけるところはサポートできるようにしていきたい。

※ 調査・研修終了後、一週間以内に会派事務局へ提出してください。

調査・研修報告書（会派個人用）

会派名： 地域政党きずな庄原議員団

報告者： 林 高正

実施場所：福井県県民ホール ほか	実施日：令和5年10月6日～7日
■目的・課題・問題事項（調査・研修に先立っての思いや本市の現状 など） 以前は、地域包括ケアシステムという言葉が流行り言葉の様に使われていましたが、ここ近年は、地域包括ケアが定着したのかあまり聞かれなくなっていました。そんな時、今回の全国国保地域医療学会は「コロナ超え、今こそ羽ばたく地域包括ケア」というメインテーマを掲げ、「国民健康保険制度並びに地域包括医療・ケアの理念に則り、国民健康保険診療関係者が参集し、地域医療及び地域包括ケアの実践の方途を探求するとともに、相互理解と研鑽を図ること」を目的に開催されました。	
■参考とすべき事項 今回の学会は全国の所謂、僻地と言われる地域で医療・看護・介護・在宅ケア・リハビリ等に携わっておられる多職種の人たちが一堂に会して事例発表等を行われましたが、どの事例発表も正に現場の声ですので、みんな頑張っているなど感動すら覚えました。 特に今回は、広島県北広島町の雄鹿原診療所の東條環樹先生の口腔ケアを交えての事例発表は口から食べることの重要性が良く分かる内容でした。一時は、胃ろうが当たり前の様に施術されていましたが、現在は、最後まで自分の口から食べ物を摂取することが体にも脳にも一番最適だと言われています。そのために雄鹿原診療所では、デイサービスに内科医、歯科医、歯科衛生士等が出向き口腔ケアーを実践し、その重要性を皆さんで共有されています。	
■提言・その他（本市の施策等にどのように活用すべきか など） 西城市民病院の郷力院長も学会に参加されていましたが、庄原市の医療・福祉の担当課の職員や部長クラスが参加して各市町の取り組みを勉強すべきと感じました。地域包括ケアシステムは多職種が連携してのまちづくりであることを再度確認し、市内全域での取組が難しいなら、西城の次は東城という具合に、地域包括ケアシステムの環を拡げていくことを提案します。 「先進事例に学ぶの実践」こそが、生き残る道であると思います。	

※ 調査・研修終了後、一週間以内に会派事務局へ提出してください。

調査・研修報告書（会派個人用）

会派名： 地域政党きずな庄原議員団

報告者：徳永 泰臣

<p>実施場所：福井県県民ホール ほか</p>	<p>実施日：令和5年10月6日～7日</p>
<p>■目的・課題・問題事項（調査・研修に先立っての思いや本市の現状 など） コロナ超え今こそ羽ばたく地域包括ケア ～幸福の地に翔ける不死鳥の如く～ と題しての国保地域医療学会に、以前から交流のある福井県おおい町名田庄診療所所長で全国国保地域医療学会会長でもある、中村伸一氏が主催された学会に参加した。</p>	
<p>■参考とすべき事項</p> <p>○特別講演では、福井県医師会会長の池端幸彦氏から幸福度日本一と言われる「ふくい」の現状と課題に触れながら、人生100年時代の最後の四半分を支えるのが高齢者医療であり、いつかは尽きる命だからこそ、その「人生」の尊厳を守り、最期を支え寄り添う医療が求められており、これこそが地域医療の原点ではないか。</p> <p>○国保直診の役割としては、急性期、回復期における医療提供にとどまらず、認知症を始めとする慢性期や介護福祉施設、在宅医療等における生活期の医療介護さらには行政、地域が担う介護・フレイル予防に至るまで、その活躍のば場は地域全体に拡がっておりまさに地域包括ケアシステムが目指すところの「まちづくり」の担い手として、国保直診施設の役割は益々大きくなっている。</p> <p>又、二日目の専門分科会1(地域食支援、在宅ケア、看護、介護、リハ)に参加し、広島県北広島町雄鹿原診療所所長の東條環樹先生からの報告で</p> <p>○北広島町雄鹿原は人口2,000人を切り、高齢化率も50%を超えた。</p> <p>○医療、福祉、保健が一体となった総合施設、芸北ホリスティックセンターを平成6年に開設した。この施設では医科歯科連携に積極的に取り組み、他事業所や多職種とも協働を図って在宅及び施設での高齢者ケア、看取りケアを実践されてきた。</p> <p>○住民への啓発も地道に続けられ「口から食べれなくなった時どうしますか?」を提案している。老衰、もしくは疾患の終末像としての経口摂取不能状態となった時、それを自分（もしくは家族）の寿命ととらえ、納得できるかを問いかけている。</p> <p>○歯科医師、歯科衛生士が「口から食べる」にこだわり、口腔ケア、口腔機能維持の介入を、高齢者施設や在宅で提供し、専門職だけでなく家族とも情報共有することで「人生の最終章を迎える、受け入れと心構え」を関係者全員が共有するプロセスとなっていた。</p> <p>○その結果として、現在、在宅での看取りを迎えられた方は50%を超えた。</p>	
<p>■提言・その他（本市の施策等にどのように活用すべきか など）</p> <p>○現在、庄原市立西城市民病院の建て替え議論も進む中、今後の地域医療の「かかりつけ医機能」、人口減少社会による患者数の減少など、地域医療の近未来像を市民の皆さんと一緒に議論し、進めて行く時期であろうと思います。</p>	

※ 調査・研修終了後、一週間以内に会派事務局へ提出してください。